

玉里邸庭園

1 ここにある奇跡

旧島津氏玉里邸庭園

—旧島津氏玉里邸庭園は島津家第27代当主斉興（なりおき）によって、天保6（1835）年に築庭された大名庭園です。旧邸宅書院からの観賞を意図して造られた「上御庭（うえおにわ）」と池周辺を歩きながら庭園全体を観賞できる回遊式の「下御庭（したおにわ）」という二つの庭園からなり、江戸時代末期の庭園の様子がうかがえます。また、庭園内の随所に、南九州独特の趣向をこらしたり、材料を用いたりするなどの風土的特徴がみられます。

このように、景観にすぐれ、歴史的にも貴重なものであることから。平成19（2007）年7月26日に、国の名勝に指定されました。（鹿児島市公園公社ウェブサイト）—

災禍に耐えて

足を踏み入れると一気に外界と異なる空気に包まれる感覚。

重厚な黒門をくぐり高い木々が茂る庭に進んでいくと、パッと開けて大きな池が目の前に。ここが鹿児島市立鹿児島女子高等学校の敷地にあり、周りを住宅地に囲まれた空間であることを忘れます。

江戸時代末期に造られた玉里邸は、西南戦争と太平洋戦争による戦火にみまわれ建物の多くは消失。

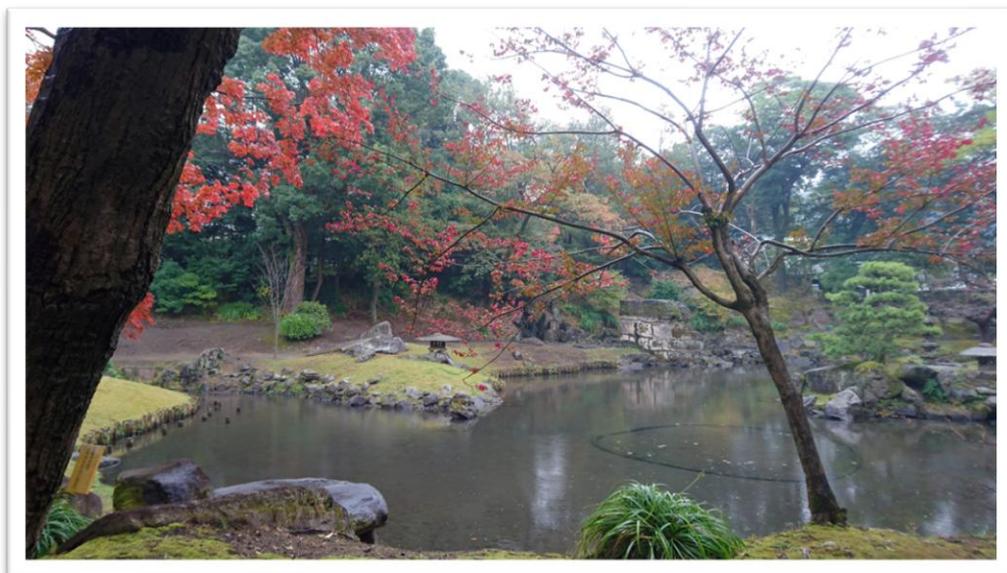
さまざまな人の想いと手を経てこの貴重な庭が残されています。

いつでもここに

季節を感じて癒される・・・玉里邸庭園の散策には無料で入れます(/・▽・)/！

いつも公開されているのは回遊できる「下御庭（したおにわ）」。

行く前に知っておくと、もっともっとおもしろくなるお庭の見どころをお話します。



2 滝石組



玉里邸庭園 茶室から眺められる滝

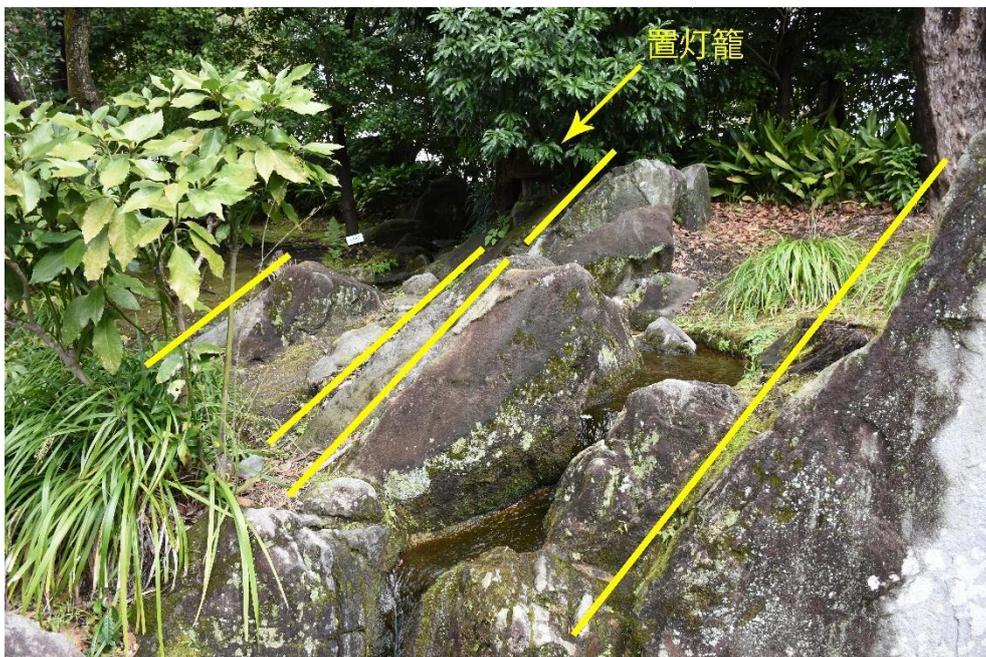
左手の山が重なる間から滝が落ち右へ流れ、池へ向かっています。
右橋に見える小さな灯籠が「キリシタン灯籠（織部灯籠）」。

茶室から眺める滝

玉里邸茶室縁側から眺められる滝の石組が秀逸。

常緑樹で被い薄暗くした中に、山が幾重にも重なるように石の重なりで見せる山の奥深さ。

“蓬莱山”を思わせる石組で、奥深い森から湧き出た清水が流れとなり滝から落ちていく姿を丁寧に描いています。石は横から見ると実は平べったい石。“板状節理”の特徴をよく考えて配置されています。





火口が花頭窓の灯籠はとても珍しい！！1

流れの奥には“花頭窓（かとうまど）”のある草庵置灯籠。火口が丸でも四角でもなく、とても珍しい上部が尖った“花頭窓”。“蓬莱山”奥の薄暗いところに知らないと思えない！見逃さないようよくよく目を凝らしてください！

蓬莱山：蓬莱（ほうらい）

中国の神仙思想に説かれる三神山の一。山東半島の東方海上にあり、不老不死の薬を持つ仙人が住む山と考えられていた。蓬莱山。蓬莱島。よもぎがしま。（大辞泉より）

板状節理（ばんじょうせつり）

岩石中に発達する平らな板のような規則正しい割れ目。火山岩などにみられる。（大辞泉より）

花頭窓：火頭窓（かとうまど）

上部が尖頭アーチ状の窓。唐様建築に初めて使われた。源氏窓。花頭窓。（大辞泉より）

暁の茶事？

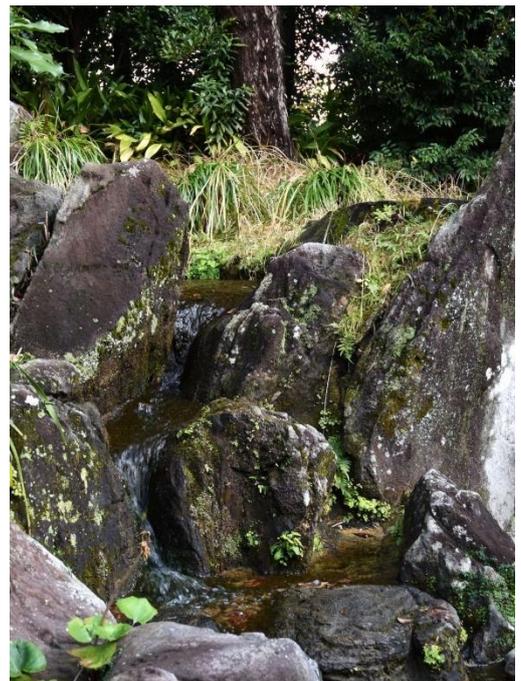
この灯籠に火が灯っていたらどんな感じに？

灯火で石の稜線が浮かび上がり、流れもきらりと輝いて見えたかも。

暁の茶事なら・・・席入りの刻には暗闇の中でほのかに浮かび上がる滝と水音が客を迎え、空が白むにつれだんだん姿を表していく。庭のおもしろさが際立って♡ (^o^)/ ♡ お茶が点てられるのを待つ時間には・・・滝の落ちる音、水の流れる音が静かな茶室に満ちたはず。

滝は耳でも楽しむもの・・・耳も澄ましてみてください。

この滝は鹿児島では珍しい「二段落ち」、水音でそれがわかるでしょうか？



落ちた水の流れを変化させる“水分石（みくまりいし）”もいろいろ。水の行方を追って歩いてみて♪

舌石—板状節理石

茶室から眺められる滝の“蓬莱山”にも使われる板のように平たい石は、火山噴出物が堆積してできた溶結凝灰岩・板状節理の石。鹿児島庭園でよく見かけるもの。



茶室から眺められる滝石組を横からみたところ
正面から大きく白い山に見えていた石は実は板状で薄く、平たい石を立てていることがわかります。

特に滝石組では平たい石を水平に飛び出すように置いて、滝の流れを“離れ落ち”にする手法があり、玉里邸庭園にも巨石（磯石）横の滝にこの手法が。水の落ちる様子がよく見えます！



玉里邸庭園 巨石近くにある瀧



「玉里邸庭園」水が落ちる滝口 「舌石」平たい石が突き出して“離れ落ち”になっています。

この滝口の平たい石のことを鹿児島では「舌石」と呼びます。

舌を出せ！

多彩な滝がある仙巖園の滝石組では、そのほとんどで「舌石」が見られます。鹿児島で昭和50年代頃まで流行した池造りでも同様に多く見られ、現場では「ペロを出せ！」と表現されていたらしい。地元の特徴ある石を効果的に使った滝石組。鹿児島でお庭をみるときはぜひ注目を！



「名勝 仙巖園」御殿下の滝口



拡大して見たところ

薩摩藩島津家別邸「名勝 仙巖園」 (2015年世界遺産登録)

—仙巖園は、万治元年（1658）に19代島津光久が築いた別邸です。桜島や錦江湾を庭の景色に取り入れた借景庭園で、その雄大な景観を活かして、島津家・薩摩藩の迎賓館のような存在でもありました。（仙巖園公式ウェブサイト）—



玉里邸庭園 【下御庭 概略図】

3 キリシタン灯笼

織部灯笼

茶室から眺められる滝のたもとにある小さな不思議な灯笼。

灯笼の足元、竿の部分に人のかたちが見える。これは「キリシタン灯笼」または「織部灯笼」といわれる灯笼で、戦国武将で茶人の古田織部に好まれ茶庭や数寄屋造りの庭園の点景物として広がったとされているもの。

人のかたちに見えるところはマリア観音や神父を表すとも言われ、キリシタン信仰の礼拝の対象とされたとも言われます。



竿石上部の丸くふくらんだところには“記号”
のような文字のようなものも見える。

アルファベットやヘブライ語など諸説あり、
何を表しているのかよくわかりません。

なぜここに？

最初からこの場所に置かれていたかははっきり
してないらしい。

そもそもなぜ玉里邸にキリシタン灯籠が？

江戸時代草創期、島津家はこの古田織部と親
しい交流があったことがわかっています。そ
の頃につながるものでしょうか。

漫画「へうげもの」で古田織部を知る人も多
いかも？いろいろ想像ふくらみます(・∀・)

玉里邸庭園には個性的な灯籠がいろいろある
ので、あちこち注目してみてください！



4 亀石橋

幅広く大きな石の橋

茶室の目の前に平べったい大きな石があります。実は流れに架かる石橋。





玉里邸庭園 茶室前の大きな石「亀石橋」を横から見たところ

あまり見かけないかたちだし茶室のすぐ近くにこの大きさというのは、ちょっと違和感感じるほど。
この石橋に対して“橋挟み石”は、立石の大きなものも似合いそうなのに平坦すぎる。



玉里邸庭園 茶室前の「亀石橋」 “橋挟み石”は平坦で橋に用いられた大石とほぼ高さが同じ。

橋挟み石（はしばさみいし）

庭園の池に架けてある橋の、両たもとに置く石。橋引き石。（大辞泉より）

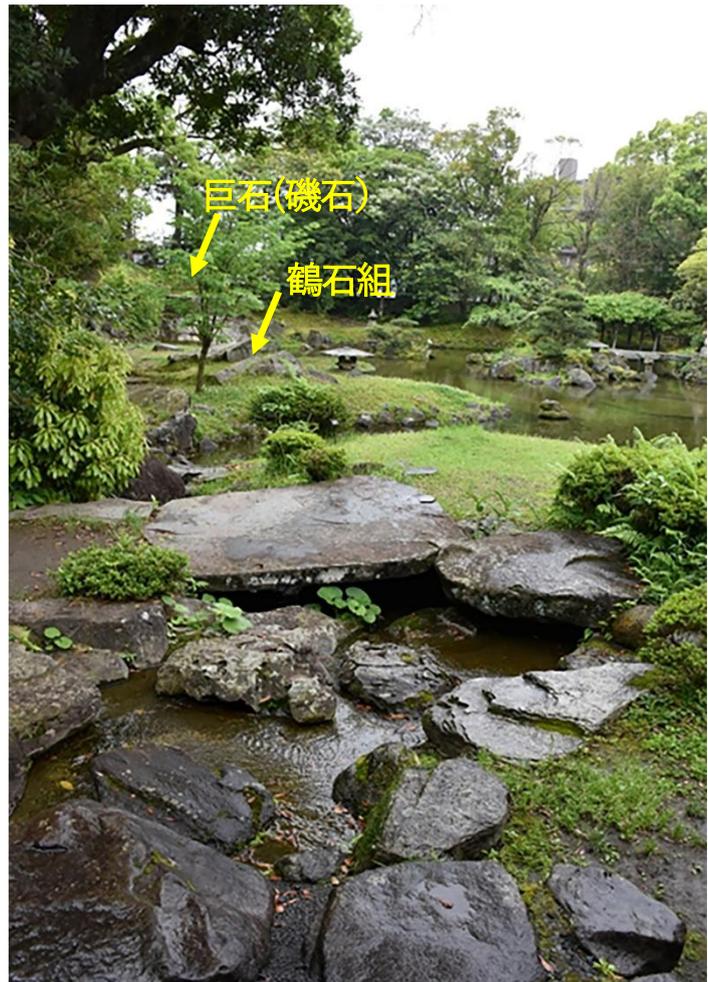
亀石組

でも・・・茶室から見た石橋は、四つの橋挟み石が亀の足に大海を悠々と泳ぐ海亀のように見える。亀石として組まれたのかな。

茶室の縁側から見ると亀が川を競り上がる姿にも見え、亀石の軸線上には鶴石組や巨石（磯石）が。鶴と亀をあわせた鶴亀石組になってるみたい！

鶴亀は長寿の象徴、縁起の良い石組。

日本庭園でよく見られるけど表現のしかたはいろいろ。玉里邸庭園の鶴と亀はなかなか個性的です(*^^*)



蓬莱神仙庭園（蓬莱式庭園）

蓬莱神仙思想を元に造られる。この思想の中では不老不死の仙人が住む蓬莱山が理想郷として信じられ、神仙の使とされる鶴と亀は長寿の象徴。

橋挟み石の表現



橋挟み石は庭園の橋の両端に据えられる役石のひとつ。

園路から橋へと進んでいくとき単調にならないよう視線を受け止める石です。

（左図：「名勝 仙巖園」）

回遊式庭園は石橋がたくさんあります。一つ一つの石橋の架け方と橋挟み石の配置や大きさは本当にいろいろおもしろく、工夫されていてさまざまな表現が。

何を表してるのかな？なんでこうしたのか？ちょっと注目してみるとおもしろいです。

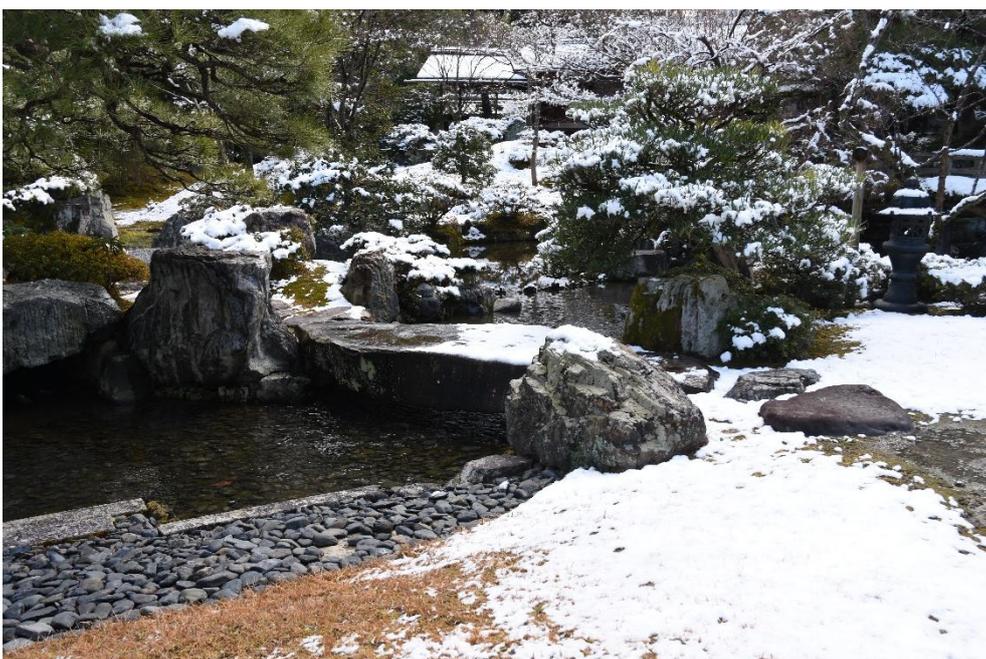
夜の姿も・・・

実は、必ずと言ってよいほど夜歩くための灯籠が石橋のそばにあるんです。その種類や位置関係がいろいろおもしろい♪

例えば仙巖園のある石橋。平面で長い橋の石を四つ割りにしているのは単調さを回避するためかな？ 橋の平面な感じに対して、橋挟石は手前に大きな横長の石を置いて、他の石は小ぶりにして灯籠の明かりが届くように伏せて置かれています。灯籠の笠は大きくして、明かりが足元に広く届くようにしているんです。



「名勝 仙巖園」 右手前は大きな橋挟み石、左の灯籠は傘が大きい。



京都御所 御池庭の石橋 奥左の橋挟み石が高い山のよう。

京都御所御池庭にある石橋の橋挟み石では一つだけ背が高い石があり、山を表現しているよう。富士山の姿ととらえると・・・ちょっと思い浮かぶのは伊勢物語の東下り（あずまくだり）の一節。自分を“要なきもの”と思い都を後にして、いくつもの河を渡ったり駿河国では富士を見たりして都を思う歌を詠みながら江戸へ向かうという東下り。暗に江戸に下るのを皮肉った橋挟み石か。思い巡らすといろんなことが考えられそうです！



京都 金戒光明寺 この石を選んだのはどうしてだろう？



山口 萩城庭園

仙巖園と同じく溶結凝灰岩がつかわれています。この庭園にも多くの石橋が架かり、橋挟み石が見られます。この橋狭石右側の天端が平たい石は灯籠の置き台なのでしょう。

5 自由に想像！

まっすぐ並ぶ飛び石



玉里邸庭園で特に気になるところが・・・まっすぐ並ぶ飛び石。巨石（磯石）のところにあります。

途中から沢渡石へと変化しながらもまっすぐくっつくようにしてつながっています。

普通、飛び石は一步一步の歩みを無理のない動作でできるような配置が基本。右、左、右、左と飛び石同士の距離や方向、庭全体のバランスを考えて石の配置が工夫されます。

庭づくりの専門用語では「直打ち」「二連打ち」「二三連打ち」「雁打ち」「千鳥打ち」「大曲り」など昔からいろんな打ち方があります。玉里邸庭園茶室周りの飛び石は、曲がったり、飛び石から沢渡りに変化したりと複雑に絡み合った配置が見られます。

巨石とセット？

このまっすぐに配置された飛び石は直打ちの打ち方。茶室から離れたところ、まずここに飛び石とかな必要かな？という疑問。左は崖、右は異様な巨石との間に挟まれた狭い狭いところを通る不自然さ。

この不自然さは、庭園オーナーの意向が働いているのでは？

崖と巨石の狭間に向かって一直線に並んで伸びる飛び石。何かを表してる？



玉里邸庭園 まっすぐ並ぶ飛び石「島津の退き口」？！
この狭間を通す・・・不思議！

島津の退き口か？！

狭間を抜けると言えは？？「島津の退き口」か？！

この庭園オーナーの島津氏は、関ヶ原の戦いで「島津退き口」という歴史上有名な敵中突破を遂げています。この様子を飛び石にたとえて、大石と崖に挟まれた狭いところ、危険極まりない狭間に向かってまっすぐに飛び込む騎兵軍団として表現したのでは。

敵中突破の誇りを目に見えるかたちにしたのでは。この巨石にも“島津氏の強い意志”を感じます。

島津の退き口（しまづののきぐち）

慶長5年（1600）9月15日（新暦10月21日）午後、関ヶ原合戦で西軍が総崩れになる中、最後まで戦場に残っていた島津義弘隊は、敵中突破による前進退却を敢行し、多大な犠牲を払いながらも大将の義弘を薩摩に帰国させることに成功しました。世に名高い「島津の退き口」です。（大垣観光協会ウェブサイト「大垣西美濃観光ポータル水都旅」より）

巨石の謎

玉里邸庭園を訪れてみると、この巨石が印象に残る方も多いでしょう。

縦・横およそ 3.5m、高さおよそ 3mのほぼ立方体の自然石で、磯（現「仙巖園」前の海岸）の海中にあったものを 53 個に分割して運び込まれ、ふたたび継ぎ固められたと伝えられています。

また一般の方は見ることはできませんが、上面には「柱穴」が残されていて、何らかの「祠」が祀られていたと考えられているようです。

手間と時間をかけて運ばれてきて、この庭づくりに大きな役割を持っていると思われる巨石。

何を思ってここにこの石が？自由に～自分だけの答えを探しながら見てみましょう(*▽)

6 三橋様式

渡れなくていいんです！

玉里邸庭園にはもう一つ見逃したくない石橋があります。

重量感があり見応えある「三橋様式」の石橋。石橋のかかった中島を俗世間と離れた仙人の住む「蓬莱島」と見立てることもできそう。

石橋としては、奥に末広がり石、中央に島と下御庭を結ぶ細長の切石、手前に上部が平たく長い短冊石をあしらっています。橋を渡って島に行くのは怖そうなんですけど・・・象徴としての橋だから渡れなくていいんです！



玉里邸庭園 三橋 渡れません！



玉里邸庭園 三橋 中央の石が細く、軽快さを感じます。

島と下御庭を結ぶ中央の細長い切石は、橋脚を動かないようにしている石でもあり大きな石を使用したときの鈍さを軽快な感じで打ち消して三橋をまとめているようです。

「三橋」に注目

造園で「三橋」といえば、中国の故事「虎溪三笑」にちなむものと考えられることも。三石が儒教、仏教、道教の三宗を表し三教の合一や超越を意味するとも言われ、天龍寺の龍門瀑下に架かる三橋が有名です。



「名勝 仙巖園」 三橋



探勝園（鹿児島市照国町） 三橋

三橋様式の石組は、島津氏と関係の深い仙巖園・探勝園（鹿児島市照国町）にも架かっていて、それぞれ特徴がありおもしろいです。

虎溪三笑

—中国の故事。廬山の慧遠法師は、虎溪（谷）を越えて外出しない誓いを立てていたが、儒者陶淵明と道士陸修静とが訪れたとき、見送りに談笑しすぎて虎溪の石橋を渡ってしまい、三人で大笑いしたという話。史実ではないが儒仏道三教の親和を表した話で、画題にもなっている。（世界宗教用語大事典より）—

7 深まる石組の世界

沢渡石

玉里邸庭園ではおもしろい沢渡石がいろいろ見られます。

茶室の園路は飛び石から沢渡になりまた飛び石に移り変わってます。珍しい感じ。



流れ中段の沢渡石は小気味よいリズム♪



島津退き口か？巨石横の沢渡石の並びもおもしろい。

左に滝音を聞きながら・・・敵中突破？力強く軍隊が行くような沢渡石です。



板状節理を生かす

溶結凝灰岩・板状節理の石組は、仙巖園・知覧庭園など鹿児島県の庭園でよく見られる特徴のひとつ。玉里邸庭園でもあちこちに見られます。平たい板状節理の石の見せ方は、見る方向に対して石の面を立てて見せる。見える面積を広くしてできるだけ大きな石に見せるという手法。正面と横からと見てみるとおもしろいです(*^^*) “板”の感じがよくわかります！

土留めの石組



正面から



横から

蓬萊山の石組



正面から



横から

島の護岸石組



正面から



横から

知覧庭園のほうが早い時期に造られているので、その頃からの特徴といえるのかもしれませんが。

玉里邸庭園は石のすぐそばに近づけるし、大胆な石づかいで豪快な庭だと思うので、ぜひ石組に注目して見てください。

想い馳せる

華やかな桜や紅葉を見に行ったり、江戸や明治の時代にここに誰がいてどんなことがあったか・・・歴史のお話に興味があったり、庭園や史跡に足を運ぶ思いは色々だと思います。

いろんなことに想いを馳せながらお庭を楽しむ。そこでちょっと石や水の流れにも目を向けてみると深い世界があることが見えてきます。

地元の石の特徴が生かされていたり、庭の主の思いが感じられたり・・・

灯籠や瀧の特徴、橋挟み石や沢渡石などキーワードも知っておくとより楽しめると思います(・v・)